

自閉症状を示した障害児の 学校適応に関する追跡研究Ⅵ (1)

——自閉症児の普通学級適応についての検討——

園山 繁樹*・佐竹 真次*・前川 久男
有松 慶子*・磯 和夫**・幸田 実**
小山 章子***・李 根梅*・藤原 義博***
小林 重雄

幼児期に治療教育・訓練を受けた後小学校普通学級に入学した自閉症児6名についての6年目の報告である。本研究では、主にS-M社会生活能力検査による結果を検討した。その結果、1) IQとSQには一定の関係はみられず、2) どの対象児においても「集団参加」のSAが相対的に低く、3) また3名では、「意志交換」のSAも低いことがわかった。さらに、未習得な技能の項目を分析することによって、以下の技能の習得が困難であることがわかった。1) 複雑なルールが関連する技能、2) 自主性に基づく技能、3) 「思いやり」のある技能、4) 相手の立場を考える必要のある技能。

キーワード：自閉症児 追跡研究 社会生活能力

1. 問題と目的

幼児期に治療教育・訓練(行動療法)を受けた後、小学校普通学級に入学した自閉症児の学級適応について、我々は1年毎にその経過を報告してきた(板垣ほか, 1979; 山根ほか, 1980; 板垣ほか, 1981; 園山ほか, 1983; 園山ほか, 1984)。本報は6学年時の報告である。

対象児が3学年時の報告(板垣ら, 1981)では、以下のことが明らかにされている。1) 基本的な生活習慣やくり返し行われる活動についてはほとんど問題がみられない、2) 教科学習の達成度は全般に低いが、機械的な学習や単なる知識の習得は良好であり、アンバランスな発達がみられ、自

閉症特有の知的障害がうかがわれる、3) 学校生活上は、他児や教師を困らせる行動はほとんど無くなり、それなりの生活の技術を身につけている。

そこで、4学年、5学年時の調査では、主に標準化された検査を実施し、算数と国語の学習達成度及び知能レベルについて検討した。その結果、前学年の学習レベルを達成しているのは、算数では1名、国語では2名であった。WISCについては、一般に自閉症児に特徴的であるといわれているように、一般的理解と絵画配列が相対的に低く、数唱問題と積木模様が高いことがわかった(園山ほか, 1984)

さて、小学校最終学年である本年度の調査では、1) 田中ビネー知能検査、2) グッドイナフ人物画知能検査、3) 絵画語彙検査、4) ITPA、5) S-M社会生活能力検査、6) 教研式観点別到達度学力検査、7) 母親へのインタビューを実施し、その特徴と関連を検討した。その結果の概要については、小林ほか(1983)によって報告されている。ところで、社会的発達の障害、あるいは対人関

* 心身障害学研究科
* 教育研究科
** 総和町立下辺見小学校
** 古河市立第四小学校
*** 谷原村立福岡小学校
*** 上越教育大学

係の障害、コミュニケーションの障害は、自閉症児の診断の上できわめて重要な側面としてとらえられてきている。たとえば、Kanner (1943) は、自閉症児の特徴の1つとして、他者との情緒的なかわりの欠如を指摘している。また、Rutter (1978) は、社会的発達の障害、小林 (1980) は、感情的なかわりの障害を、診断基準の主要なものと考えている。また、こうした社会的障害については、追跡研究によっても、障害の程度の差はあれいくつかの研究で明らかにされている (若林、水野、1975)。

本研究の対象児では、学校生活上大きな問題となる行動は軽減してはいるが、社会生活に適應していく上での社会性に関連した技能についてはこれまで検討されてこなかった。本報では、S-M 社会生活能力検査の結果を中心に報告し、その詳細な検討を行う。

2. 方法

1 調査内容

小林ほか (1983) に述べられているように、S-M 社会生活能力検査、田中ビネー知能検査を含む種々の標準化された検査、及び母親へのインタビューを個別に実施した。調査期間は、昭和58年8月である。

2 対象児

対象児は、小林の基準 (1980) により自閉症と診断され、就学前に筑波大学知能障害研究室で指導を受けた児童である。昭和53年4月に小学校普通学級に入学した5名の6年生と、1年間の就学猶予の後昭和54年4月に入学した1名の5年生 (H児) である。各児の概要は、表1にまとめてある。(各児のアルファベット記号は前報と同一である。また、各児のT-CLACサイコグラムは、前報を参照されたい。)

Table 1 対象児の概要

	対 象 児					
	A	B	C	D	E	H
性別・生年月	男子 1971, 9	男子 1971, 7	男子 1972, 2	男子 1970, 11	女子 1972, 2	女子 1971, 12
主 訴	他児と遊べない。 落ちつきがない。 指示に従えない。	言葉の遅れ	他児と遊べない	言葉の遅れ。落ちつきがない	言葉の遅れ。ひとり遊びが多い	集団適応がよくない。先生の指示に従えない
生 育 歴	熟産。吸引分娩 生下時体重 3760g 始歩 11カ月 始語 6カ月	陣痛微弱。早期破水。吸引分娩 生下時体重 3140g 黄疸が強かった 始語 12カ月	熟産。正常分娩 始歩 11カ月 始語 17カ月	熟産。正常分娩 生下時体重 2800g 始歩 11カ月 始語 12カ月	熟産。早期破水 生下時体重 3200g 始歩 10カ月 始語 42カ月	黄体ホルモン服用。帝王切開 生下時体重 3400g 始歩 10カ月 始語 14カ月
大 学 での 訓 練 期 間	1年10カ月	2年5カ月	9カ月	2年4カ月	1年10カ月	3年7カ月
指 導 経 過	1977, 5-1977, 9 個別 1974, 6-1978, 2 小集団 1978, 4- 家庭教師	1975, 10-1977, 9 個別 1977, 6-1978, 2 小集団 1978, 4-1982, 3 家庭教師	1977, 5-1978, 2 個別 1978, 1-1978, 2 小集団 1978, 4-1983, 3 家庭教師	1975, 11-1977, 2 個別 1977, 6-1978, 2 小集団 1978, 4-1984, 3 家庭教師	1976, 5-1977, 9 個別 1977, 6-1978, 2 小集団 1978, 4- 家庭教師	1975, 9-1979, 3 個別 1978, 9-1979, 3 小集団 1979, 3- 家庭教師
就 学				1年猶予	情緒障害児学級に5年まで通級。普通学級では1年時のみ介助員がつく。	1年猶予。情緒障害児学級に通級。普通学級では介助員がつく。

3. 結果

1 IQとSQ

表2に、田中ビネー知能検査によるMAとIQ、及びS-M社会生活能力検査によるSAとSQが示されている(H児のIQは昭和56年度調査の結果)。SAがほぼ生活年齢と同等なものはB児とE児のみである。また、IQとSQがほぼ同等なものはC児、E児、H児である。

図1は、IQとSQの関係を図示したものである。

2 S-M社会生活能力検査プロフィール

対象児	田中ビネー		社会生活能力	
	MA	IQ	SA	SQ
A	12:10	108	10:08	89
B	8:08	71	12:00	98
C	10:06	91	9:08	84
D	8:08	68	10:03	80
E	12:06	109	12:00	104
F		66	7:02	61

図2は、S-M社会生活能力検査の領域別SAのプロフィールを示している。ほとんどの対象児で、「集団参加」のSAが相対的に低い。

3 S-M社会生活能力検査の項目分析

表3は、発達段階指標V以上の項目毎の各児の習得状況を示している。発達段階指標IV以下(6歳6か月未満)では顕著な特徴はみられなかった。

表4は、「集団参加」「意志交換」及びそれ以外の領域について、技能の未習得人数毎に項目をまとめたものである。

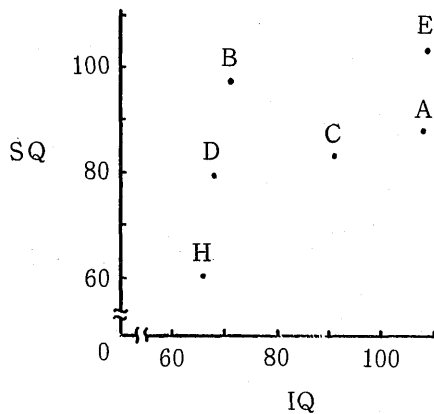


図1 IQとSQの関係

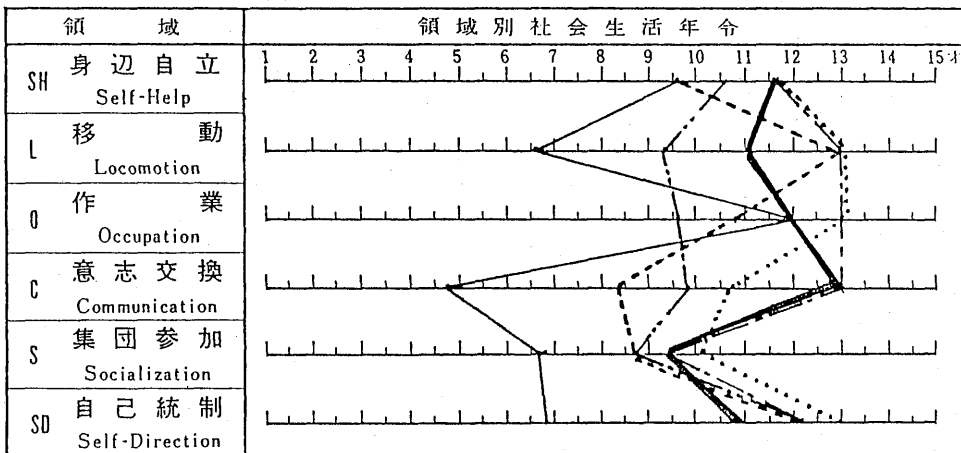


図2 S-M社会生活能力検査の領域別SAプロフィール

A ——— C - - - - E - - - - -
 B - - - - D - - - - - H ———

表3 S-M社会生活能力検査の項目別習得状況（発達段階指標V以上）

発達段階指標	V →										VI →												
領域	項目番号																						
身辺自立 移動作業 意志交換 集団参加 自己統制	7980	84									94	96											
						86	89			92			98		103								
		8182					88	90					100		10 105								
									91	93					104								
	78		83	85		87					95	97		101	102	106							
対象児																							
A	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+	-	+	-	+	+	+	+	
B	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	+	+	+
C	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
D	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
E	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
H	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

表4-1 S-M社会生活能力検査の未習得人数別項目（発達段階指標V以上）

集団参加			
未習得人数	発達段階指標	項目	内容
6			なし
5	VII	123	日常接している学校や地域の友達以外の人間関係にも関心を持つ。
	VI	99	年下の子どもの世話や子守などを安心してまかせられる。
4	VII	126	おとなの指導者がいなくても、グループで会合やハイキング、スポーツなどの計画をたてて実行することができる。
	VI	101	野球(ソフトボール)、バスケットボール、サッカーなどをルールに従ってできる。
3	V	91	学級会(ホームルーム)で自分の意見を述べられる。
2	VI	110	学校全体の役割(児童会の委員など)ができる。
	V	87	将棋、トランプなど複雑なルールの遊びができる。
1			なし
0	V	93	学校や地域のクラブ活動などにメンバーとして参加できる。

表4-2 意志交換

未習得人数	発達段階指標	項目	内容
6	VII	121	相手の立場を考えて話すことができる。
5			なし
4	VII	128	敬語を正しく使い分けられる。
3	VII	122	新聞の記事や小説などを読んで理解できる。
	VI	104	目上の人にはていねいなことばを伝える。
2	VII	107	わからないことばや表現を辞書でしらべることができる。
1	V	90	友達などへ自分から年賀状などを書き、あて名を書いて出すことができる。
	V	88	必要に応じて要件や要点をメモできる。
	V	82	必要に応じて自分で電話がかけられる。
0	V	81	身近な事柄について簡単な文章(日記、作文)が書ける。

そこで、各技能の未習得人数毎の項目について検討することによって、どのような技能の習得が困難であるかを明らかにしたい。

「集団参加」領域については、以下のようにいえるだろう。

- ①明確な役割のある技能は習得されやすい (項目93, 110)。
- ②複雑なルールが関連する技能ほど習得が困難 (項目101, 87)。
- ③自主性に基づく技能は習得が困難 (項目123, 126, 91)。
- ④「思いやり」のある技能の習得は困難 (項目99)。

「意志交換」領域については、

- ①発達段階が低い技能は習得されやすい (項目81, 82, 88, 90)。
- ②相手の立場を考える必要のある技能は習得が困難 (項目104, 128, 121)。

その他の領域については、学習の機会が少なかったと考えられる技能が未習得のものが多い (項目130, 129)。

また、「集団参加」技能は主に学校において習得機会があり、その他の領域の技能は主に家庭において習得機会があると考えられる。一方、「意志交換」技能は、学校と家庭双方で習得への配慮がなされる必要があろう。

これまで、本研究の対象児については、学校生活上は大きな問題行動はほとんどみられないことが明らかにされてきている。しかし、今回の調査では、社会生活能力の技能に関し、この年齢段階では習得されていなければならない技能について、いくつかは共通して習得が困難であることがわかった。また、母親へのインタビューにおいても、学校場面以外の友達関係が稀薄であることがA児、D児、H児について報告されている。今後は、中学校を始め、より複雑な社会生活へと適応していかなければならない本対象児達について、より細かな配慮を各々の生活場面で行っていかなければならないだろう。

付記 調査資料収集に際し、大塚養護学校の平田幸宏先生及び人間学類の矢野純子さんに協力いただいたことを記して感謝します。

文 献

- 1) 板垣健太郎, 山根律子, 太田千鶴子, 藤原義博, 堀之内高久, 池弘子, 小林重雄, 長畑正道, 斎藤義夫, (1979): 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究 I (2) — 自閉症児の普通学級適応についての検討一, 心身障害学研究, 3, 101-109.
- 2) 板垣健太郎, 藤原義博, 財部盛久, 野口幸裕, 小山望, 太田俊己, 田村元郎, 古川千賀子, 打越実, 飯島郁郎, 笠井実, 国谷時司, 鈴木正彦, 池弘子, 小林重雄, (1981): 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究 III (1) — 自閉症児の普通学級適応についての検討一, 心身障害学研究, 5(1), 1-11.
- 3) Kanner, L., (1943): Autistic disturbances of affective contact. *Ner. Child*, 2, 217-250.
- 4) 小林重雄 編者, (1980): 「自閉症児—その臨床像と技法—」, 川島書店.
- 5) 小林重雄, 前川久男, 大野裕史, 加藤哲文, 園山繁樹, 古田真理, 武蔵博文, 佐竹真次, 平田幸宏, 近藤明子, 藤原義博, 自閉性障害児の学校適応に関する追跡研究, (1983) 安田生命社会事業団研究助成論文集, 19, 69-86.
- 6) Lockyer, L. & Rutter, M. (1970): A five-to fifteen-year follow-up study of infantile psychosis: IV. Patterns of cognitive ability, *Brit. J. soc. clin. Psychol.*, 9: 152-163.
- 7) Rutter, M., (1978): Diagnosis and definition of childhood autism, *J. Autism Childhood Schizophrenia*, 8: 139-161.
- 8) 園山繁樹, 藤原義博, 板垣健太郎, 太田俊己, 加藤悦子, 松浦裕子, 阿部義光, 小野沢正俊, 古内良勝, 松本敬子, 小林重雄, (1983) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究 IV (1) — 自閉症児の普通学級適応についての検討一, 心身障害学研究, 7(1): 33-37.
- 9) 園山繁樹, 藤原義博, 松浦裕子, 加藤悦子, 府川恵子, 日浦伸祐, 金子充夫, 菊池一也, 中沢要之, 杉田忠夫, 平野忠夫, 小林重雄, (1984) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究 V (1) — 自閉症児の普通学級適応についての検討一, 心身障害学研究, 8(2): 31-37.

- 10) 山根律子, 太田千鶴子, 板垣健太郎, 藤原義博, 財部盛久, 池弘子, 小林重雄, (1980) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅱ (1) —自閉症児の普通学級適応についての検討—, 心身障害学研究, 4(1): 82-91.
- 11) 若林慎一郎, 水野真由美, (1975) 自閉症の予後についての研究, 児童精神医学とその近接領域, 16:177-196.

Summary

The Follow-up Studies Concerning School Adjustment of Handicapped Children with Autistic Symptoms VI (1)

—Discussion with adjustment of autistic children in regular class—

Shigeki Sonoyama, Shinji Satake, Hisao Maekawa,
Keiko Arimatsu, Kazuo Iso, Minoru Kohda, Akiko Koyama,
Keunmae Lee, Yoshihiro Fujiwara, and Shigeo Kobayashi

The six autistic children with relatively high intelligence who had been introduced in the regular class were evaluated by the Tanaka-Binet Intelligence Test, the S-M Social Competence Test and by other tests.

No significant correlations were found out between IQ scores and SQ scores. All 6 cases were found out with relatively lower SA in "socialization", and 3 were with lower SA in "communication".

Furthermore, it seemed difficult for them to acquire the following skills; (1) Comprehension of the complicated rule, (2) Spontaneous activity, (3) Sympathetical understandings of peers, (4) Appropriate communication with others.

Key word: autistic children, follow-up, social competence